法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-15

〈書評と紹介〉松村淳著『建築家として生きる ： 職業としての建築家の社会学』

牧野, 智和 / MAKINO, Tomokazu

(出版者 / Publisher)
法政大学大原社会問題研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌
(巻 / Volume)
777
(開始ページ / Start Page)
61
(終了ページ / End Page)
65
(発行年 / Year)
2023-07

書評と紹介

松村淳著

『建築家として生きる
——職業としての建築家の社会学』

評者：牧野　智和

「建築家」をどう捉えられるか

建築家という言葉から，どのようなことが連想されるだろうか。有名建築家の誰かを思い浮かべて，先進的，あるいは奇抜なデザインの建築を手がける半ば芸術家のようなイメージを抱くかもしれないし，建築を生業としている有資格者（すなわち建築士）すべてを思い浮かべるかもしれない。前者のみを建築家だとするのはさすがに狭すぎるが，一方後者では広すぎる。それらの中間には，華やかな仕事はなくとも独立して事務所を構える者，そこで雇われ働く者，企業のなかで設計に携わる者，意匠ではなく構造に活路を見出す者など，さまざまな建築への携わり方が存在する。これらのうち，一体誰を建築家と呼ぶことができるのだろうか。このような建築家イメージの曖昧さは，専門家においてさえ建築家の定義をめぐる合意が存在しないことによると著者（松村氏）は指摘する。私たちの日々の生活はほとんどすべて，何らかの建築物のなかで営まれているというのに，それを手がけた人々を建築家といっていいのかよくないのか，それが判然としないというのはよく考えると不思議な状態である。

建築家とは何かを考えるにあたって著者が採用するのは，建築を生業とする人々に通底する「建築家のエートス」（道徳的気風）こそが，建築家なるものの根底にあるのではないかという見立てである。ただこのエートスを抽出するにあたって，建築関係者に話を聞いていくというだけでは建築に携わるさまざまなあり方を包括して考えることができないと著者は述べる。建築に携わるさまざまなあり方相互の位置づけ・解釈を可能にする視角として著者が採用するのは，ピエール・ブルデューの理論枠組である。つまり，社会の内部にある専門分化した，相対的に自律した規則を有する社会空間＝「界」の一つとして「建築家界」があると見立て，建築をめぐるさまざまな携わり方をその空間上の相対的な位置づけのもとに把握しようとしている。

この枠組を採用することには，総合的なメリットが多くある。建築家界での上昇を目指そうとする場合，型通りの建築ではない自身の「作品」を示す必要があるが，それはまさに界のなかでは「卓越化」のための闘争が繰り広げられ，その「ゲーム」に勝つための「賭け金」（建築家界の場合，建築作品がそれになる）を必要とする，というブルデューの指摘にまさに合致する。また，そもそもこのようなゲームに参入するにあたっては，建築作品のような賭け金は他の界では通用しないかもしれないが，少なくとも自らがいるこの場においてはその賭け金に価値があり，またそのために闘争に参入することを是とする信念が共有されている必要があるが，ブルデューはこうした信念についても

「イリュージオ」という概念を用意している。界への参入メカニズムそれ自体はもちろん重要だが，本書の肝になっているのがこのイリュージオ概念だと評者（牧野）は捉えている。それは，本書では建築家界の中心にいるような有名建築家を主たる分析対象にするのではなく（彼らは本書前半および第７章で，建築家界全体の形成・展開を押さえる際に参照されている），界の大多数を占める，いわば「周辺」の建築家たちに注目していることに関連がある。彼らは，賭け金としての建築作品を手がける機会に出会うことがなかなかできず，ゲームに没入するどころか，参加できているかも疑わしい状況にある。このようなゲームの周辺に位置する人々を捉えるにあたっては，闘争参入を支える信念としてのイリュージオ，つまりそれが一種の幻想であることを含み入れた概念を用いることで，彼らの建築家界の参入程度をそれぞれ捉えることが可能になる。こうした分析視角が序章「建築家の分析枠組み」で述べられ，以降九章にわたって具体的な分析と考察が展開される。

各章の概要

では，分析パートの概要をみていこう。第Ⅰ部「建築家の生成と変容をめぐって」では，上述したように建築家界の形成と展開が記述されている。第１章「職能の確立と消費社会との関連性」ではまず，明治期から戦前期まで，つまり近代社会の成立期において建築家という職能がかたちをなしていくプロセスが整理されている。戦後になり，住宅難を背景に，また1950年に建築士法が制定され，大学で建築を学ぶ者が増えていく状況のなかで，若い建築家たちは競争を生き抜くべく住宅設計を自らの賭け金とする戦略を採用するようになっていった。やがて住宅メーカーが合理的で量産可能な住宅開発を軌道に乗せると，それらに対するさらなる卓越化を期して「芸術としての住宅」という評価軸が重みをもつようになってくる。

第２章「『スター文化人』としての建築家の誕生」では，住宅メーカーが性能・意匠面の向上に取り組み続け，建築家との示差性が縮小した以後の卓越化のあり方を記述している。まず黒川紀章と安藤忠雄に注目してその示差性，つまり建築家の「作家性」「ブランド」を通した，洗練という卓越化のあり方が示されている。安藤らのいわゆる「野武士」世代はやがて時代的にも，建築表現としてもポストモダンの波に入り込んでいくが，バブル崩壊後にデビューした世代の建築家は，前世代の華やかさやぎらつきを身にまとうのではなく，よりカジュアルに，また多様なあり方で建築家としてのあり方を示そうとしている。ここまでの章に出てくる主要登場人物は，建築学者による近現代建築史と大きく変わるものではないのだが，本書の筆致はブルデュー理論を下敷きにした社会学的建築史ともいえるもので，他に類をみない独創的なものだとまず評価することができる。

第Ⅱ部「『建築家のエートス』と職業としての建築家」が本書の核となる部分といってよいだろう。四つの章をかけて，「建築家のエートス」の教化とマネジメントのありようが検討されている。まず第３章「『建築家のエートス』を涵養する場としての大学」では，大学で受ける教育が卒後の建築設計実務と緊密に結びついていないにもかかわらず，ゼネコンや設計事務所が工業高校・専門学校卒ではなく大卒生を専ら採用することについて，大学で学ばれる実務と必ずしも直結しない何か，つまりエートスが期待されているのではないかという見解が示される。このような観点にもとづき，大学での教育を通じたその涵養，特にこの章では感性や態度としての「ハビトゥス」形成のありようが分

析されている。自らが手がける建築を理路整然と説明できるようにすること。建築史を学び，多くの建築物を実際に見て審美眼を養うこと。小奇麗にまとめるより時間と労力をつぎ込んで試行錯誤すること。教員が教え込もうとするこうした感性や態度の文化的恣意性は，講評会という一種の儀礼的な場面を通じて正当化ないしは隠蔽されることになる。建築教育をめぐる「支配的ハビトゥス」とそれをめぐる文化的恣意，それらを正当化・隠蔽する「象徴的暴力」というように，ブルデューの理論を採用したことがここでも活きている。

第4章「建築家になる」は，第3章で描かれたようなエートスを体得しながらも，賭け金となる「建築家としての仕事」を得ることが困難な「周辺」的建築家へのインタビュー調査の分析である。彼らは困難な状況であっても，建築家として名乗ろうとすること，「下請け仕事」などに手を出さないこと，自分なりの建築家としてふるまうことを，ある種の矜持として保持しようとする。また，より若い頃においても「やりがい搾取」ともいえそうな設計事務所での激務・薄給を自らの資本の蓄積のために甘受していた。彼らは建築家界の中心にいるわけではないが，にもかかわらず，界における存在証明に希望を抱いて，プレイヤーであり続けようと模索している。

第5章「建築家として生きていく」では，地方で継続的に設計事務所を営んでいる建築家へのインタビューが行われている。多くの設計事務所が経営に苦慮している一般的状況のなかで，特に地方における状況は厳しい。そのなかで建築家たちはやはり，短期的な収益確保（＝下請け仕事）に手を出して建築家としての長期的軌道から逸れることを避け，生計を設計とは別で立てたり，たとえ儲からなくてもクライアントに感謝されたことを糧として建築家の矜持を保とうとしている。また，地方でも経営的に成功しているとみることができる建築家の場合，彼らの設計および自身のブランディングに成功していることがその一因にあると考えられ，それはまさに第2章でみたような洗練されたスタイルが，地方における卓越化の指標として機能していることの表われと捉えられている。

第6章「建築家ではない設計者たちの職業世界」ではさらに，「建築家ではない設計者」を対象とし，彼らの職業観・建築観の分析がなされている。置かれた状況はさまざまだが，住宅会社においてクライアントの希望をかなえること，構造面から意匠を修正していくこと，構造設計事務所として身を立てその立場から建築家を批判すること，といったかたちでそれぞれの矜持をやはり表明していた。このように第Ⅱ部では，建築家界の各位置に応じた各プレイヤーの身の立て方が明らかにされるとともに，それぞれが建築家のエートスを内面化ないしは距離化していることが浮き彫りにされ，建築家界という見立ての有効性が結果として立証される内容になっている。

とても興味深い補論「建築士受験のセルフエスノグラフィ」を挟んで，第Ⅲ部「後期近代と建築家の変容」では，今日的な動向とそれに応じた新しい建築家の姿が描かれている。第7章「脱埋め込み化の進行と建築家の役割の変容」では，二つの大震災を経て「専門家システム」（ギデンズ）が再編成され，「ハコモノ」批判のなかで意匠よりもアクティビティを重視するまなざしが強まり，またショッピングモールに象徴されるような工学的空間が台頭してくるなかで，「顔の見える専門家」という新しい建築家像，あるいは建築家の新しい職能が提案されるようになってきたことが述べられている。

第8章「コンピュータ・テクノロジーの進展

と建築家の職能の進展」では，設計支援ソフト（CAD）の浸透が建築家の職能をどう変えていったのかが聞き取りから浮き彫りにされている。手書きからCADへの移行は建築家のアウラを消失させるような危機を生じさせ，これまでの建築家への一方向的な信頼を成立させ難くなったが，その代わりに建築家とクライアントは双方向的なリスクを共有するような関係性を取り結ぶようになっているという。オープンに情報を開示し，顔の見えるプロセスのなかでそれを共有していくという職能の変容は，第7章で述べられたマクロな変化の補助線となっている。

第9章「『脱エートス』の建築家像と後期近代」では，近年注目されている「参加型リノベーション」にかかわる建築家の実践を調査分析することから，建築家のエートスおよび建築家像の現状を描き出そうとしている。協働で施工を行う参加型リノベーションへの注目は，空き家の増加，中心市街地の空洞化，建築ストック利活用への関心拡大といったいくつかの背景が相まったところでの建築家の職能拡大論とともに起こっているが，それに建築家がかかわることは，戦前期以来議論され，戦後においてはほぼ自明となった設計と施工の分離という原則を踏み破ることになる。そのため，施工を行う建築家への風当たりは未だよいものではないが，参加型リノベーションにかかわる建築家はクライアントに寄りそう「まち医者的建築家」という対抗イメージをもち，建築家界への関心自体を相対化している。協働が作業報酬として認識されにくいという難点はありつつも，このようなあり方は後期近代における「顔の見える専門家」として，建築家が今日果たしうる役割を示していると解釈されている。終章「後期近代と建築家のゆくえ」では，各章のまとめと今後の展望が述べられて本書が締めくくられている。

本書の功績

このように本書では，それぞれにオリジナリティの強い九つの分析章を通して，建築家界の成り立ちとメカニズム，そのなかでの各プレイヤーの戦略，今日的状況におけるその変容と展望が重層的に描かれている。ブルデュー理論を彼自身が適用した対象以外に転用する場合，それがうまくいったかどうかはケースバイケース，つまり全体的なあてはまりの程度から判断するほかないように思われるのだが（これは評者の不勉強かもしれないが），各章を経ての評者の読後感はこんなにもよくあてはまるのか，というものだった。ハビトゥスの形成[(1)]，確固たる賭け金，卓越化へのアスピレーションとそれに対する複数の相対的位置取り，冷却，幻想が効力を有する一定の範囲などからみて，総合的なあてはまりの程度がとてもよいように思われた。もちろん，ブルデュー自身が議論の対象とした大学（『ホモ・アカデミクス』），芸術（『芸術の規則』），住宅（『住宅市場の社会経済学』）に建築家はそれぞれかかわるところがあると考えると，ブルデュー理論による建築家界の分析可能性は見込めそうではあるのだが，それをこれだけの視点から（これを散漫ととる人もいるかもしれないが），各章それぞれに説得的に描き出せたことは大きな功績といってよいだろう。このようにブルデュー理論の応用という面でも本書の意義は大きいが，建築という社会学にとってほぼ未踏といえるような領域に大

(1)　大学教育を通して，その後につながるエートスやハビトゥスの涵養が見込める専門領域は今日の日本で果たしてどれくらいあるのだろうか。その意味では建築は特殊な領域なのかもしれないが，人々を引き込む幻想が生じうるような条件があるとしたらそれは何なのか，本書の知見とは離れてしまうが気になるところであった。

きく一歩踏み出した点においても，本書は以後のこの領域における必須のマイルストーンになるだろう。

というより評者自身が，著者に続いて建築を対象とした研究（牧野智和，2022,『創造性をデザインする――建築空間の社会学』勁草書房）をまとめるにあたって，本書を大いに参考にさせていただいた。我田引水で恐縮だが拙著との関連でいえば，1990 年代以降の学校建築やオフィスデザインにおけるアクティビティを誘発する空間デザインの台頭について，本書における磯崎新とお祭り広場という一つの起点，および機能性や媒介性を前景化させていく建築家界における立ち位置の指摘はそれぞれ，評者にとって貴重な解釈資源になった[(2)]。また，やはり拙著でとりあげた「場」の産業としての建築観についても，その象徴といえるコミュニティ・デザイナー山崎亮の位置づけや，参加型リノベーションに実際にかかわる建築家への継続調査での知見は大いに参考にさせていただいた。

今述べた「場」の産業としての建築に一部かかわることとして，社会学の立場からすれば，かつて「社会開発論」などが論じられ，都市や地域の開発・発展に関して社会学者が一定のプレゼンスをもっていた時期は過ぎ去り，今日では工学分野の専門家がその専門知識・技術さらに近年ではファシリテーションスキルによって圧倒的なプレゼンスを誇っており，社会学者の入り込む余地はほぼなくなっているような印象を評者は抱いていた。しかし本書では，当の建築家自身もその職能に危機感を抱いていることが指摘され，評者の思い込みの浅さを思い知らされた次第であった。このような点も含め，多くの点で本書は建築という社会学未踏の領域に光を当て，かつてない認識利得をもたらしてくれている。著者からは今後，建築（家）をめぐるさらなる知見がまた提出されることになると思われる。期待して待ちたい。

（松村淳著『建築家として生きる――職業としての建築家の社会学』晃洋書房，2021 年 3 月，ix ＋ 287 ＋ 15 頁，定価 2,970 円（税込））

（まきの・ともかず　大妻女子大学人間関係学部人間関係学科教授）

(2)　著者からは直接，アクティビティ誘発への志向が，本書第 3 章でとりあげられているような大学教育のなかで涵養されている可能性があるのではという指摘をいただいたこともあった。